



AGULI



- | | | |
|---------------------------------|-------|------|
| * 巻頭エッセイ The White of the Eye | 平澤 典男 | P. 2 |
| * 特集 卒論・レポート必勝法 Part7 | | |
| テーマがみつからない! | 木村 光彦 | P. 3 |
| コピーで作る論文 | 菅原 佳城 | P. 4 |
| 読み手を想定する | 皆木 健男 | P. 5 |
| いい汗流そう、図書館で。 | 左近 豊 | P. 6 |
| * 世界食料デー 1016 キャンペーン in 図書館〔青山〕 | | P. 7 |
| * ビブリオバトル in 万代記念図書館〔相模原〕 | | P. 8 |
| * 選書 Weeks・リサイクルブックフェア | | P. 8 |

The White of the Eye

地球社会共生学部長 平澤典男
HIRASAWA Norio

AGULIのこの号の特集テーマは「卒論・レポート必勝法」だという。卒論はゼミナールでの最終課題であろうから、ゼミに関することを少しばかり書く事にする。題は“The White of the Eye”目の白い部分、そう、「白目」である。

飲み会と称するゼミの懇親会で学生に何度か尋ねられたことがある。

「先生、どんな基準で僕達を選んだんですか。」そんなとき、わたしは笑いながら「たまたまだよ」と答えてきたと思う。何度かは成績を点数化したり、提出レポートの枚数で熱意を測ろうとしたことはあったが、ボーダーラインで合格したゼミ生が実は素晴らしい才能を持っていたことが後でわかったという経験を何度かくりかえしている、私自身の審査力そのものが不合格なのではないかという気がして、「たまたまだよ」という答えになるのである。

だが、よくよく考えて答えるなら「表情」で選んでいると言ってもいいかもしれない。なかでも「目」である。ある意味、普通の答えじゃんと思われたかもしれない。ならばこう言い換えよう。「白目」で選んでいると。以下はその理由である。

霊長類のなかで人間だけが美しい白目を持っていると言われている。目の白目の部分が瞳と同じ色であったと想像してみると、彼がどの方向を見ているかは判別できない。白目があることで私たちは彼がどちらを見ているかを知ることができる。本来、どこを見ているかを知られてしまうことは敵に次の攻撃を読まれてしまうから不利なはずである。しかし、人は争いの少ない社会を築く過程で不利だった白目はむしろ有利なものとなっ

た。誰を見ているかをはっきりと示し、意思を伝える効果的な手段となったのである。白目があるから表情を豊かに表現できるようになり、同時に表情を読みとる力を備え、意思疎通が可能になったことで協力の手段を手に入れた。(最近気づいたのだが、ハリウッド映画に出てくる悪魔は白目を持たない。)

ところで、ゼミは目標を実現するために組織された集団である。目標の達成にはメンバーが協力することが不可欠である。そして、コミュニケーションがとれて始めて協力が生まれる。よってゼミにとって最も必要なのはコミュニケーションであり、私たち人間に備わった最も素朴かつ基本的なコミュニケーション手段が「白目」なのである。メールやSNSでのコミュニケーションがしばしば誤解を生むことは諸君も経験済みと思うが、何と言っても確実なコミュニケーションは顔をあわせた会話である。会話はときに裏の意味を持つこともあることを考えると、多少の訓練は必要だろうが「目」を見ることももっとも確実に信頼できるコミュニケーション手段と言ってもよいであろう。そして目にコミュニケーション力を与えているのがほかならない白目ではないだろうか。

こうして、わたしが「たまたま」この学生はいかなと思う学生は、実は意識せずに白目を用いて熱意を私に伝達していた学生なのではないかと思う。(もっとも、白目を意識的に使われた日には、ちょっと気持ち悪いかもしれないが。) 諸君、どうぞゼミ仲間と共に助け合い、学び、素晴らしい卒論を書いてくれたまえ。



テーマが見つからない！



木村光彦
KIMURA Mitsubiko

旧約聖書『創世記』は、天地創造の次第を次のように記している。「はじめに神は天と地とを創造された。地は形なく、空しく、闇が淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてを覆っていた。神は『光あれ』と言われた。すると光があった。神はその光と闇とを分けられた。神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。神はまた言われた。『水の間の大空があって、水と水とをわけよ。』・・・神は大空を天と名づけられた。・・・第二日である。」この後、神は水を一つ所に集め、これを海と名づけ、乾いた地を陸と名づけた。そして地に草を造った。これが第三日である。さらに第四日に天体、第五日に魚と鳥、第五日に地の獣と続き、第六日の人で、創造のわがが終わる。

ここでひとつの疑問が湧く。神は水を造ったとは書いてない。水はいつできたのだろうか。始めからあったのだろうか。そうすると神がすべてを造ったことにはならない。それとも第0日があって、その日に水を造ったのだろうか。何とも分からない。このほかにも、考えれば、いくつも疑問が出てくるだろう。どう解けばよいのか。

多くの人は、これは単なるお話なのだからこだわっても仕方ない、考えても時間の無駄だと思うだろう。しかし、ユダヤ人は違う。ああでもない、こうでもない、と聖書の記述について、数千年にわたり延々と議論を重ねてきた。そこでは結論は出ていない。いや、出さないといいようが正確

だろう。とにかく、疑問を出す、考える、そのことが重要なのだ。

このような伝統、歴史を通じて、ユダヤ民族は自らの知性を磨いた。その中から、多数の偉大な学者が生まれた。アインシュタイン、フロイト、マルクス、レヴィストロース・・・後世に大きな影響を与えたユダヤ人（系）学者を数え上げればきりが無い。

最近わが国で、中学生が発表した研究成果が注目を浴びた。それは「気温が38度だと暑くてたまらないのに、風呂の温度が38度だとなぜぬるく感じるのだろうか」という疑問に答えたものである。中学生たちは、仮説を立て、いろいろな実験を行い、試行錯誤のうへ、明確な結論を導いた。これには、中学・高校の理科の先生ばかりでなく、大学の研究者も「うーん、なるほど、そうか」と感嘆せざるをえなかった。

大事なことは何か。疑問をもつことである。すべてはそこから始まる。身近な問題でもよい。抽象的な問題でもよい。疑問、とりわけ、誰も思いつかなかった疑問をもち、それを一生懸命、考えることだ。そうすれば中学生でも素晴らしい研究ができる。大学生なら尚更である。健闘を期待します。

(卒論の具体的な書き方は、本号で他の先生の書いたもの、および本誌バックナンバー、67、70、74、82、103号の特集「卒論・レポート必勝法」(図書館HPで公開)を参照してください。)

(国際政治経済学部教授 経済学)

コピペで作る論文

菅原佳城
SUGAWARA Yoshiki

「文献には著作権があり論文やレポートをはじめとする文章作成においてコピペ（コピー&ペースト）をすることは良くないことです。」ということをお願いわけではありません。むしろ、本原稿では「積極的にコピペを使った論文・レポート作成をしよう！」ということをおススメします。しかしながら、このように書いてしまうと著作権とかどうなるの？ という疑問が沸くと思いますが、いわゆる悪名高いコピペではなく、純粋に「コピペ」を利用しようということです。

一般的に文章作成は、慣れていない人にとってはストレスになります。もちろん、慣れている人にとっても良い文章を簡単に書けるわけではなく、論文など比較的ボリュームのある文章となると、書き上げるまでにかなりの労力を使うことになります。しかも、効率的に進めたいという意識が働くことから、何千行も書かなければならないのに1行目から何時間も推敲してしまうという泥沼に陥る人もいます。文章作成はトップダウン的にできるものではなく、書き進めるにつれて最初に書いた内容に矛盾が生じ、書き直してはまた書き進めてという推敲の繰り返しです。これを0から文章を作るとなるととても苦勞します。これは、より効率的に進めたいという心理のもと、最初から100点満点の文章を書こうとしてしまうからです。そのような心理的負担がモチベーションの低下になり、作業が進まないというケースが多く見られます。

また、理系の論文では図を描いたり、数式を入力するといった文章作成とは色の違う作業も発生

します。一般的に、人は何か新しい作業を始めるときにストレスを感じると言われています。それゆえ、文章を順調に書き続けている途中で、図の作成や数式入力などの作業に移らなければならなくなることでストレスを感じ、モチベーションが低下してしまう人は少なくないと思います。

このような「100点満点を目指してしまうが進まない」、「作業が変わるとモチベーションが低下する」といったことを防ぐ1つの方法として、普段からメモ書きレベルの文章、図および式などを小まめに作成して、論文作成はそれらをコピペで済ませてしまうというやり方があります。メモ書きレベルであれば、おそらく100点満点の完成度になるようなメモ書きを作る人はいないと思います。そのため、メモ書きであれば非常に気軽に書くことができ推敲して進まないということはありません。また、メモ書きとは言え記録に残すということから、ある程度意味のある文章や図を書くことになるため、100点満点ではないものの十分に利用価値のある完成度のものができているはずです。それゆえ、メモ書きとして作った部品を使って、コピペという作業で100点満点の文章を組み立てるということになります。結局は「普段から取り組もう」といったよくある結論とあまり変わらないかもしれませんが、メモ書き程度の記事であっても普段から準備することで、最終的な論文作成のハードルを大きく下げることができ、モチベーションの低下を防ぎながら効率的な論文作成を行うことができます。

(理工学部准教授 機械力学・制御工学)



読み手を想定する

皆木 健男
MINAKI Takeo

はじめに

私が担当する「卒論・レポート必勝法 Part7」は、おもに、はじめてレポート・卒論を作成する学生を対象に、作成時の注意点を説明することを目的としています。残念ながら、これにしたがえば、“単位がもらえる”というレポート・卒論作成方法を解説するものではありません。さらにいえば、学問ごとに求められる論文の形式は異なります。ジャーナルごとに異なるのです。したがって、論文の執筆形式については、担当される先生に確認する必要があります。以下、学生の作成したレポートを読むさいに目にすることの多い事例を紹介しながら、レポート・卒論の作成時における注意点を説明します。

レポート・卒論の目的

学生の皆さんがレポート・卒論を作成する目的は何でしょうか？ 単位をもらうために仕方なく書くという返答がきそうですが、その目的は、“自分が学び理解したことを他者に説明するため”です。つまり、多くの場合、レポートの読み手は、担当の先生となります。卒論であれば、先生(担当の先生以外を含む)および後輩がおもな読み手となるのでしょうか。

レポートについては、そのテーマは先生から与えられることが多いと思います。「読み手=先生」を想定すると、与えられたテーマについて、自ら調べ、検証、考慮した結果を先生に論理的に説明すればよいことになります。読み手が先生である

ことから、専門家が読み手です。よって、専門用語を調べてまとめましたというレポートをもとめてはいません。先生がもめているのは、与えたテーマについてあなたの結論とそこに至るまでの過程をわかりやすく説明してくれることです。わかりやすくというのは論理的にということです。

よくあるレポートは、テーマについてこれだけ調べ、こう思いましたというものです。これは論理的ではありません。調べたものが意見なのか事実なのかを区別し、その事実から何が説明できるかを考えるだけで、レポートの完成度がかわりません。自分の意見なのか他人の意見なのかを区別することも必要です。

卒論も同様です。ただし、卒論の場合は、専門家以外を読み手に想定する必要があります。専門家以外を読み手に想定する場合、専門用語やその分野では定説であることでも、それを説明する必要があります。

おわりに

レポート・卒論を作成する学生を対象に、作成時の注意点を説明してきました。読み手を想定し、自分が学んだことをわかりやすく説明するために何が重要かについて書きましたが、これは一度レポートを作成すれば身につくことではありません。何度も繰り返すことでしだいに身につくことです。どんな文章であっても、読み手にわかりやすく伝えることを念頭に作成してください。

(社会情報学部准教授 ファイナンス)



いい汗流そう、図書館で。

左 近 豊
SAKON Tom

レポートや論文は、モノログ（独り言）であるよりはダイアログ（対話）、独り相撲ではなく格闘技のようなものかもしれません。味わい深い対話がなされているものは読む者をも引き込んで行くでしょうし、熱い闘いをしている論文には、読み手も心躍らされることでしょう。

W.ブルグゲマンという私もお世話になった先生は、著作や論文を毎年量産していましたが、大変な数の書物や論文を読んでいる人でもありました。旅の途中でも空港の待合室や機内で必ず2冊は読んでしまう。ある学生が、どうやったらそんなに読めるのか、と驚きをもって聞いたとき、先生は、たくさん読んでいると、どんどん早く読めるようになるんだよ、とニヤッと笑いながら答えていました。どうやら本を読むとき、その著者が何を相手に闘っているのか、論敵は誰なのか、そしてどのような研究者相手に対話をしているのかを見定めて読むようなのです。そうすると的確に素早く主旨を把握できて、今度はそれにどう挑むかを考えながら論文を書くことになる。

ある時にこうも言っていました。論文やレポートを読む時、その書き手が何を怖れているかを見極めるといいよ、と。説得力に圧倒され、書かれていることにぐうの音も出ないほどに納得させられて、議論の鮮やかな切れ味にほれほれして舌をまいてしまって、もう脱帽するしかないようなものでも、書き手が人間である限り、四つに組んで取り組むうちに見えてくる癖のようなものや、こだわり、力み、そしてついには新たな議論の発展を促すような糸口が蟻の一穴となりうることを

発見するに至る。実はそこそこが、その書き手が気づいていないかもしれない、否、むしろ目をそらしている議論の弱みなのかもしれません。時として横綱でも土俵に転がされるように、真剣勝負を挑む相手に一瞬よぎる恐れを見逃さずに決め手を得る時、それを明らかにするために書かれたレポートや論文は、大事な学問的貢献となるのです。

弱みを突かれること、また恐れを暴露されることは決して心地よいものではありませんが、された側はその弱みを認めて克服して次なるフェーズへと進化し、恐れを所在を示唆されることで、自らその恐れを対象化して次なる一步を踏み出す足掛かりとすることにもなります。対話と格闘が真剣であればあるほど、読み手も書き手も一層切磋琢磨して、互いに感謝と敬意をもって力量を増して新たな段階へと進みゆくことになるでしょう。

レポートや論文を書くために図書館で本を漁り、紐解く時、そこに繰り広げられている学問というフィールドでの、分野によっては何千年にもわたる真剣なバトルの、終わりなき鞘当てや競り合い、格闘や葛藤の跡を垣間見ながら、きっと2018年の今、この世界で生きているからこそ見えてくる、そしてあなたにこそ与えられているユニークな視点という武器をもって、この血沸き肉躍る探求の世界への招きを味わうことでしょう。その時、大学でのレポートや論文への取り組みは、きっと生涯にわたって忘れえぬ、いい汗流した体験となることでしょう。

(国際政治経済学部教授 旧約聖書学) 青山スタンダード

学生有志チームによる特設展示

世界食料デー 1016 キャンペーン in 図書館

10月16日は国連が定めた「世界食料デー」です。この秋、本学学生が国連WFP（国際連合世界食糧計画）のミッションに共鳴し、**飢餓ゼロ**のための<1016キャンペーン>として行なった多様な活動のうち、図書館本館での**特設展示**を企画した<1016 図書館チーム>の活動を紹介します。



レッドカップ WFPが給食を入れるカップ
子どもたちの未来への希望のシンボル

【展示概要】

目的：図書館を利用する多くの人達に、「本」を通し、世界の食料問題や飢餓の深刻な現状について、知ってもらい考えてもらう機会を提供する。

期間：2018年10月8日～20日

場所：青山キャンパス図書館 1階特設展示コーナー

展示：①（ガラスケース展示）国連 WFP のおすすめ本、紹介ポップ、レッドカップ、関連資料

②（エントランス展示）学生による選書本、紹介ポップ、おすすめ本リスト、ハンガーマップ、リーフレット

③（レッドカップチャレンジ）利用者の方にレッドカップに入った赤い●シールを手作りポスター（世界の子どもの絵）に貼ってもらうことで食料問題への興味をいっそう高めてもらう。

<1016 図書館チーム> おすすめの本（抜粋）

- * 世界から飢餓を終わらせるための30の方法
- * 90億人の食糧問題：世界的飢餓を回避するために
- * フードバンクという挑戦
- * なぜ世界の半分が飢えるのか：食糧危機の構造
- * 世界の半分が飢えるのはなぜ？
：ジグレル教授がわが子に語る飢餓の真実
- * 世界飢餓の構造：いま世界に食糧が不足しているか
- * 飢餓の世紀：食糧不足と人口爆発が世界を襲う

国連 WFP の方のおすすめの本

- * 肥満と飢餓：世界フード・ビジネスの不幸のシステム
- * 貧困のない世界を創る * スラムの惑星
- * フード・セキュリティ * 食の終焉
- * 国連で学んだ修羅場のリーダーシップ

青山か相模原の図書館にありますので、皆さん、どうぞ読んでみてください。



（手前）学生選書本と（右奥）レッドカップチャレンジ



関連資料とポップも

1016 キャンペーンを通し、上記目的のため図書館にコーナーを作らせていただきました。キャンペーン期間中、毎日図書館に足を運びましたが、展示しているはずの本がなく、誰かが今図書館内で読んでくれているのだということに気付いたときや、レッドカップチャレンジの大きな模造紙に、日を重ねるごとに赤いシール●が増えていくのを目にした喜びはとて大きいものでした。少しでも興味や関心を持ってくれた人がいることを実感することができたのが何より嬉しいです。

コーナー設置に協力してくださった図書館の皆さま、そして一緒に取り組んでくれたスタッフに心から感謝しています。ありがとうございました。
リーダー 福田樹舞さん（国際コミュ1年）

おすすめ本のポップを作成するなど、微力ながらこの活動に関わることができ、とても貴重な経験になりました。この展示を見て少しでも関心をもってもらえたら嬉しいです。

スタッフ（国際コミュ1年）村田みなみさん 星野さん 廣崎さん



企画から交渉・実施まで全て学生が行ない、図書館はほんの少しのノウハウと場所と備品の提供のみ。しっかりした内容とチームのピュなおもいに心うたれる素敵な展示でした。（青山キャンパス本館）

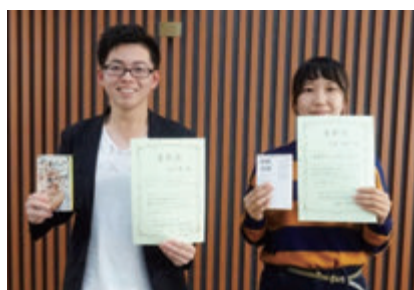
知的書評合戦 ビブリオバトル

in 万代記念図書館

相模原祭初日の10月6日(土)に「ビブリオバトル in 万代記念図書館」を開催しました。

「ビブリオバトル」は、お勧めの本を持ち寄り、順番に1人5分で本を紹介し、それを聞いた参加者全員の投票で「チャンプ本」を選ぶ書評ゲームです。

2007年に京都大学の研究室で考案され、全国に広がりました。万代記念図書館での開催は今年で5回目、8人の学生が参戦しました。観戦者や他の発表者との質疑応答も盛り上がり、楽しい場となりました。



1回戦のチャンプ本に輝いたのは、及川響さん(史3)の『**インドなんて二度と行くか! ポケ!!…でもまた行きたいかも**』(さくら剛著)。自身のインド旅行の話を交えながら時に笑いを誘い、観客を惹きつけました。



2回戦では、草薙由莉さん(日文4)の『**赤頭巾ちゃん 気をつけて**』(庄司薫著)が選ばれました。

3年連続出場の草薙さんがチャンプ本に輝いたのは2度目。特徴のある文体やその良さを自身の言葉で丁寧に伝えて勝利しました。動画は図書館ホームページで公開中です。



及川さん、草薙さんは関東地区決戦へと進みます。健闘を祈りましょう!

選書 Weeks

今年も電子ブックから読みたい本を選ぶ企画です。

【対象】 本学所属の学部生、
大学院生、教職員

【期間】 11月1日(木)
～2019年1月6日(日)

【詳細】 図書館 HP でお知らせ

リサイクルブックフェア

青山キャンパス

12月5日(水)～11日(火)

平日 / 9:30～21:00

土曜日 / 9:30～20:30

日曜日 / 12:30～18:30

図書館3階グループ学習室B

相模原キャンパス

11月30日(金)～12月4日(火)

平日 / 9:30～20:00

土曜日 / 9:30～15:30

日曜日 / 休館

図書館1階点字用ブース

詳細は図書館ホームページをご参照ください。

編集後記

今回の特集は「卒論・レポート必勝法 Part7」です。過去のAGULIを含めると、さまざまな専門分野の先生による必勝法が紹介されています。論文を執筆していると迷路に踏み込んだかのような錯覚に陥ることもありますが、そんなときに道しるべとなる必勝法がみつかるかもしれません。
(館報編集委員長 酒巻修也)

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報 “AGULI” 第105号 2018年11月1日発行 表紙写真 / 青山学院大学写真研究部
編集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL.03-3499-1402 FAX.03-3407-4472
発行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 <https://www.agulin.aoyama.ac.jp/>